



古い街並

よき時代の街並みを「今」。

— 八千代座を中心に —

「山鹿市」

市役所から旧豊前街道を右に折れると、瓦葺きの少し大きな建物が見えてくる。赤や黄色の襦が青空の中に鮮やかに映えている。八千代座は古い建物だ。古ぼけた壁が情緒を漂わす。道を狭んで反対側には、白壁の土蔵造りの家が建っている。あたりは静かで人気もない。時折、学校帰りの子供たちがワラツと走り去っていく。華々しかった昔の余韻を感じさせることも、ずいぶん少なくなった。興行がなくな

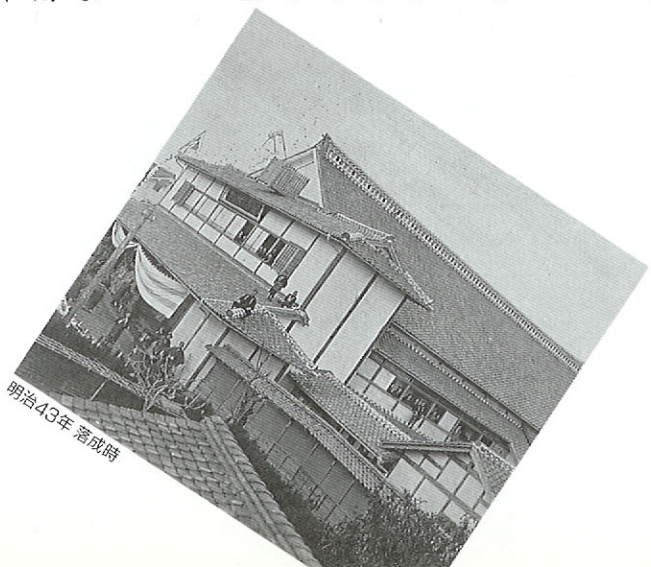
って13年。今、八千代座に新たな光が差し始めている……。

● 娯楽・流行の中心だった八千代座

山鹿市は人口約三万四千。灯籠と古墳と温泉の町として知られています。昔の山鹿は熊本市に次ぐ二番目に大きな町。肥後と筑後を結ぶ交通の要地であり、物資の集散に伴う市場町として繁栄していました。当時の集落の中心は、八千代座のある九日町を狭んで上町、下町へ続く一帯。商人の力が強く、八千代座建設にも彼らの力が大きかったようです。

八千代座ができた頃の賑わいは凄まじく、当時のことを、八千代座復興期成会理事の幸平和さんはこう語ってくれました。

「鹿北の奥の岳間ですね。あのあたりから、朝エッチラホッチラ歩いてくるでしょう。そして、温泉に入って芝居を見る。歩いて帰るから、帰り着いた時は夜が明けとったなんて話もよくあった。周囲の四、五里ぐらいの町や村から、わざわざ歩いて来てたんですか



ら。大成功やったということですよ。」大正三年頃には松井須磨子が来演。島村抱月と共に舞台から挨拶し、湯の町山鹿は「カチューシャの歌」一色になったそうです。他にも、岡田嘉子、鈴木澄子、松本幸四郎など、錚々たるメンバーが八千代座の舞台を踏んでいます。



中でも、浪花節の天中軒雲月の公演は今でも市民の語り草となっています。桜島大噴火の翌日、鹿児島からの汽車の中で書き上げ初公開となった『桜島大爆発遭難談』。大入満員で、子供まで「時は大正三年の…」と雲月節が大流行したそうです。

● 希少価値の高い造り

建物の中に入ると、冷んやりとカビくさい。雨漏りがひどくて腐食した部分もあります。総定員は一二七四人。一つの棧敷に四人が座ります。現代人の体格では三人でもやつの広さ。すぐ側には、やや広めの板が渡してあり、そこをお茶子さんが行き来したといいます。まわり舞台のレールには、KRU

PP・1910・K・6Eの刻印。一九一〇年、八千代座建築の際に、ドイツのクルツベ社から輸入したものです。当時、八幡製鉄所は開業まもなく、山鹿まで鉄はまわってこない時代でした。このまわり舞台と花道のせりは人力で動かします。

「柱がここから向こうまで十間あるんですよ。二十メートルですかね。八間ものものはあるんですが、これだけのものは他には恐らくなかったはず。日本一と自慢していいですよと文化庁の調査官からも言われましたよ。」

ふつうは、柱と柱の間に支柱があるが、八千代座にはない。柱があると、芝居が見えにくくなるからです。客席は前に向かって傾斜し、全体の構造はつ

り天井。その天井には、広告がフスマ張りになっていました。これらは、この当時の劇場としては珍しいことですが、もともと、熊本の大和座（後の歌舞伎座）をモデルにしており、いろんな工夫が施されていたのです。

● 広がる復興への輪

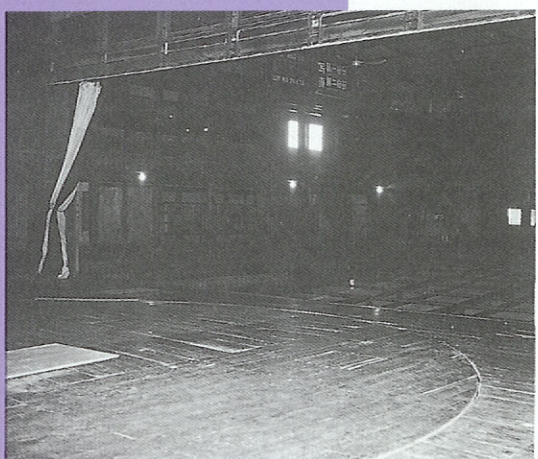
八千代座が完成して七十八年。老朽化が激しく、雨漏りがひどすぎるのを見かねた皆さんたちによって、三年前に八千代座復興期成会がつけられました。以来、積極的な募金活動を続けています。そのかいあって、去年の六月に屋根を改修。八千代座の老朽化に歯止めをかけました。当初二、三十人だった会員も今では千人近く。山鹿を中心に、その輪は全国へと広がっています。

昔から山鹿市民が愛し続けた八千代座。「みんなで八千代座を中心とした街並みづくりをやろうと、呼びかけているんです。最近では、地元のお店街の協力もあって助かっています。去年あたりから、ここでいろんなセミナーなども始めましたし、使いながら保存する文化財にしたいと思ってるんですよ。でも、まだまだこれからです。この舞台で歌舞伎をもう一度見るのが私の夢ですね。」

復興への道はまだ始まったばかり。しかし、市民の思いは熱く、昔のような活気を取り戻す日も、そう遠いことではないかもしれません。



灯籠資料館八千代座モデル(1/10モデル)



まわり舞台から客席へ

▼お問い合わせ・募金のお申し込みは
八千代座復興期成会事務局
〒861-005 山鹿市山鹿1-0202-2
山鹿市教育委員会内
TEL(0996)43-1101代